



大津波が東北地方を襲ってから、まもなく5年という月日が流れようとしています。こうした時間の経過の中で、「東日本大震災支援通信」を再び発行することになるとは、実は全く思ってはいませんでした。それは、ある意味自分たちの中で、震災から4年がたち、支援に自ら「終止符」を打とうとしていたことを意味しています。

私たち Ed.ベンチャーが、東日本大震災支援として取り組んできた対象地域は二つありました。そのうちの一つの陸前高田市の小中学校は、様々な状況を乗り越えて、統合や移転を経つつも、以前よりは落ち着いた教育環境を維持しています。一方、避難所に出会った子どもたちについては、その後の様子を見守るために、外国人青少年による当事者団体「すたんどばいみー」がたまたま陸前高田を訪れ、行事を開催する中で子どもたちの成長を確認してきました。そして、特に心配な環境にあるこどもに対しては、別枠での援助に取り組んできました。また、陸前高田には、教育支援チーム「まつ」が見守り活動を続けていてくれます。

もう一つの対象地域は石巻市の万石浦地区でした。ここでは、避難所にいた子どもたちに対して、集団遊びと学習、イベントの継続的な開催を通して、心理的なケアと人間的な他者とのつながりの回復を目指し、時には家族全体を視野に入れた支援に取り組んできたように思います。万石浦では、「ライオン学校」という名称で活動してきましたが、活動の中心を途中から大学生スタッフたちが担ってきたことも大きな特徴でした。大学生を中心とした「ライオン学校」の様子は、「伝書鳩通信」として、皆様の手元にも報告されていたことと思います。

震災支援を通して見えてきたことの一つに、「被災のダメージは、社会的に弱い立場に置かれたものほど、倍加しておそいかかる」ということがありました。震災以前の学校や地域社会の中で、弱い立場に置かれていた子どもほど、被災で受けたダメージは大きく、回復に向けての道のりは遠かったようです。それは、震災以前から抱えていた負の要素が、震災という状況下で、または、それに続く「復興」に向けた社会的動きの中で、さらに強調されてしまうことが原因となっていたことでした。このことは、陸前高田でも石巻でも、同じであったと思います。このことから、陸前高田の「すたんどばいみー」のように、「ライオン学校」の大学生たちは、特別なニーズを抱える子どもを中心に位置づけた活動を展開してきました。

【歩き出した子どもたち】

11月の末の一本の電話から今回の支援は始まりました。あまり見かけない市外局番の数字を見ながら耳に当たった受話器の向こう側からは、遠慮がちな、小さな声が聞こえてきました。

「冬休みに3人で、神奈川に遊びに行くから！いつなら行っていい？」
ライオン学校が昨年（2015）の夏に「閉校式」のイベントをやった折にも、そんな話が出たと伝え聞いていました。日程を調整して再度折り返し、12月25日（金）～28日（月）の日程が決定しました。

来るのは中学生3年生の男の子たち。小学校4年生の3月に震災に出会いました。ラ

イオン学校の早い時期からの参加者で、「富士山宿泊イベント」や「北海道スキーの旅」にも参加してくれ、生粋のメンバー。ライオン学校の子どもたちは、負の要素を抱えてしまっていた子どもたちが多く、被災のダメージが倍加されたということは、前述しましたが、この三人も本当に心配をしたものでした。クラスで強い子にいじめられ、「生きていてもいいことあるのかな？」と突然話したり、敢えて周囲を無視して、自分の世界に入ろうとしたり、思い通りにならないと叫び出したりと、スタッフたちもどう理解したらよいか、何をすればよいかかわからず、石巻の夜のスタッフミーティングでは、いろいろと話したことを覚えています。それでも、中学生になった頃から、

平成27年 冬休み 中学卒業旅行



名前

それぞれの「頑張りどころ」を見つけて、安定していったように思います。

そして、まさしく約束の日、約束の時間に、自分たちだけの力で、神奈川へと彼らは降り立ったのです。支援で見せていた、その頃のいじけた表情、弱気な顔つき、訳もわからず感情的に怒っている姿・・・そんなことはもうみじんも感じさせない表情で、旅のしおりも自分たちで作り、明るく、うれしそうに神奈川を訪れてくれました。彼らが人生で経験するであろう「自らの旅」の第1番目に、彼らはライオン学校のスタッフとの再会をその目的としてくれたのです。

【満喫】

3泊4日のなかで、実にいろいろなところに出かけ、たくさんのライオン学校スタッフにも会いました。

出かけたところは、プラネタリウム、美術館、藤子不二雄ミュージアム、秋葉原、横浜中華街、鎌倉では鶴岡八幡宮と荏柄天神。神奈川に来るときには大宮で下車をして、交通博物館にも寄ってきたそうです。下調べの細かさやバイタリティは大人顔負けでした。

また、「ライオン学校のスタッフである F が働いているレストランで食事がしたい」ということが唯一の「ワガママ」！ちょっとお高めのレストランですが、声をかけて12人での楽しい食事会もしました。初めて(?)のフランス料理に子どもたちも大満足でした。普段はあまり食べない Y もここでは完食でした。

【希望と不安】

こんなに遊んでいても、夜は自分たちで時間を決めて勉強をしていました。中学校3年生、進路・受験が気になるようです。三人は同じクラスの仲良しでいつも行動しているようですが、進路選択はばらばら。K は将来の希望をはっきりと持っていて、JR に入るまでの計画を持っています。Y は、私立の滑り止めを受けて、少し難しい高校にチ



チャレンジするそうです。そんな話の中、今回の企画の中心となった T がぼそりと聞きました。「どんな仕事に就いたらいいと思う?」「T は優しく気配りができるから、小学校の先生なんか向いているような気がするな。」「うん、まわりのともだいにもそういわれる。」でも、心なしか、その顔は浮かない顔つき。T はその実力より少し低めの高校を受験するようで、合格を第一に考えているようでした。浮かない顔つきの原因がわかったのは、次の日の夜でした。

何かの話の折に、「僕は大学には行けないんだ。高校卒業がお父さんの定年だから、僕も働いて家を助けなけりゃいけない。近くの水産工場で、ホヤでも加工するしかないんじゃないかな!」

T の家庭には様々な事情があり、そんな中、本当によく頑張っていました。中学校に入っては部活動でも活躍し、キャプテンも務めました。担任の先生の信頼も厚いようですし、成績も悪くありません。そんな彼は、きっと先生になりたいのです。いや、先生でなかったとしても、高卒でそのまま近くの水産加工場に就職し、家族を支えることを人生の役割とすることに、何か頷けないものを感じているに違いありません。

1 1月に聞いた、受話器の向こうの、遠慮がちで小さな声がよみがえりました。その時にわかったのです。彼が中心となって三人が神奈川まで来た意味が。自分たちの足で少しずつ歩み始めている彼ら。しかし、そこには自分たちの力ではなかなか解決できないこと、なかなか整理できないことがたくさん転がっているのです。中学校を卒業し、それぞれがそれぞれの不安を抱えて、それでも先に進まなければなりません。

T は思っているのです。自分が自分の人生を歩くにはどうしたらいいのか、その方法を教えて欲しいと。彼らはまだ思っているのです。ライオン学校がまだ必要なのだと・・・!

ライオン学校の会計スタッフと「会計用預金通帳を閉じる」話をしていると、聞いていた K がつぶやきました。「なくなっちゃうの寂しいな。なんとか残せないの?」

T とは別れる前に、大人からのメッセージを伝えました。「自分の夢を見つけて、それに向かっていけるよう方法は必ず考えるから、あきらめないこと。ちよくちよくメールでやりとりをすること。そして、しっかりと勉強をすること」。

彼らが、ライオン学校をよりどころとしてくれたことに、感謝と責任を感じました。

【衝撃】

衝撃はその後に待っていました。1月になり、神奈川旅行の感想を K が送ってくれました。

旅行では Y が行きたいお店が開いていなく、神田まで歩いたことや、初めてのフレンチに舌鼓を打ち、文字どおり満腹になったこと、鎌倉散策など、貴重な体験を沢山させていただきました。色々とも問題も起きたのですが、困ったときは三人で考え、助け合ったり大人の力を借りたりして問題を解決し、何事もなく旅行を終えられ、とてもいい思い出になりました。本当にありがとうございました。(K)

そして、次の T の感想を読んだとき、自分たちがまだまだ何も理解していなかったことを衝撃として受け止めました。

僕が初めて Ed. ベンチャーの方々と出会ったのは震災から約2か月後のことです。当時は小学校5年生で、まだあどけなさがあつた僕も、今となつては高校受験を控えた中学校3年生になりました。

あの頃は、毎週・毎月のように石巻に駆けつけてくれていた先生方や学生達も、最近の仕事や家事などが忙しくなり、半年に一回来てくれるのがやつのことです。そこで、当時からお世話になっている現在中学校3年生の3人が、「いつも来てもらっているから、今度は行きたい!」と言っていたこと、さらに、3人が別々の高校への進学を考えており、今後逢う機会が減っていくということもあり、「中学卒業旅行」と題し、〇〇先生宅への宿泊を兼ね、3泊4日の旅をすることにしました。

今回は、中学生3人だけで計画を立て、しおりの作成や新幹線チケットの購入なども行い、旅行の行き・帰りの仙台⇄津田間は大人の手を一度も借りずに移動をし、〇〇先生宅へ宿泊をしている時も、自分たちから率先して勉強を行ったりしました。

人と人が協力をして物事を行うことは大切ですが、自立をして自らの力だけで物事を行うというのも大切なことです。そういった点では今回自立をして、受験生として相応しい行動ができたと思います。

今回の旅行で一番楽しかったことは、〇〇先生宅で勉強をしたことです。他にも、お出掛けしたり、遊んだり、色々楽しいことも行いましたが、個人的には、勉強をしたことが一番楽しかったです。自分が解る問題を解く、解らない問題の意味を調べる、教えてもらうなどということには、楽しさが含まれていると僕は思います。

そんな勉強の楽しさを感じながら、間近に迫っている高校受験、そして残り50日を切った中学校生活に臨んでいきたいと思います。(T)

T は一番楽しかったのは勉強だということです。夜1時間程度、数学や国語のわからないところを教えたその時間が、一番楽しかったということです。プラネタリウムや鎌倉ではなく、一緒に勉強した時間だということです。T と別れる前に、大人からのメッセージとして伝えたことの責任を、今再び、さらなる重大さをもって引き受けなければならぬと感じています。

【今後の支援の予定】 未定

【ご協力いただきたいこと】

高校を卒業し、それぞれが人生の選択のスタートに立つまで、私たちに何ができるのかを一緒に考えて下さい。特に、T には、どのような方法が考えられるのでしょうか。

【ご協力に感謝!!】

■今回の支援のメンバー 清水睦美、松永雅文、藤原弘輝、柿本隆夫、大林沙紀、今井美里、甘利悠貴、清水いく江

今後3年間の支援活動のために、寄付を募ることにしました。よろしくお祈りします。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed. ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

